No. 9

図書館だより

1982. 12

上田女子短期大学附属図書館

翻訳の難しさ

北村達三

50年も英語を教えているのに、最近ますます一つの国語を他の国語に訳すことの難しさを感ずる。私は文学的作品を翻訳する場合を言うのだが、科学的文章にはこの問題はほとんどない。多少回りくどく訳せば内容はまあ正確に伝わる。だからコンピューター翻訳機が騒がれる時代である。文学作品となるとそうはいかない。文学的香りが高いほど訳すのに厄介であり、小説はまだしも、詩になるとときに絶望さえ感ずる。せいぜい内容を伝える程度で、韻律は全々だめ。60パーセント程度の翻訳ということになろう。

昔アメリカに留学していたころの話だが、私の学ぶ大学の英文学の教授が、私に一つの詩らしい英文を示して、これは、お前の国の有名な詩の由だが、説明してみてくれとのことで、それは

Old pond
Jump frog
Sprash !

で、私にはこれはすぐに、芭蕉の「古池や」の句の英訳だとわかった。さて説明する段になってハタと困った。第一にここで最も重要な「古池」(old pond)は、日本の亭々たる杉木立に囲まれて、人里遠い寺や社の裏にひっそりとしている苔むした閑寂な池なのだが、こんなイメージに合う池などアメリカにはない。降雨量が日本の半分にも充たないアメリカでは東部のニューイングランドを除いては乾燥地で、苔もあまり見られないし、日本式の池も、蛙さえも内陸部ではめったにお見にかかれない。

これでは韻律はおろか、この俳句の伝える「わび、さび」など説明することは不可能に近い。日本文学を専門に研究し、日本に長く住んだ外国人ならもちろん解る人がいるだろう。言葉はその国の風土とそこに住む人々から生れる。

昨年、一茶の句集のドイツ語訳が日本に始めてできて、その出版祝賀会に招かれたときに上智大学のインモース教授が一茶の

露の世は　露の世ながら　さりながら

の句を上げて、絶賛して、その妙味は拍たざる手の音、ぼん鐘の余いん、正に禅の境地と言われたとき、外国人がよくそこまで難しい俳句が解るものだと今さらに感心したのだが、氏は日本文学の研究家で30年以上も日本に滞在していると聞いて宜べなるかなと思った。このようなことは稀れと言っていい。

先年の学会での発表の中に、同じ簡単な一つの語をとっても、国によって持つイメージが大いに異るという例として、日本の大学で学生に「夕焼」から感ずるイメージを列挙させたところ、「美しい紅い空」「明日の晴天」などから始って「赤とんぼ」(夕焼、小焼の童謡の)まで出て、いづれも楽しいイメージであった。

これをドイツの大学で試みたところ、反対に暗い陰うつなイメージが多くて驚いた。調べてみたら、ドイツのバルト海よりの地方の夕焼はなんとなく暗い、夕立ち前のような光景であったそうである。これでは日本の「夕焼・小焼の赤とんぼ」の楽しい歌一つただ訳しただけでは完全には意味が伝わらない。

私にこんな経験がある。日本文学を研究している或るアメリカの女子学生から、林芙美子の短篇「晩菊」を英訳したから見てくれないかとのことで読んでみた。日本人は主語を除いてものを言う慣しがあるので、会話のところで相手と自分を取り違えているところがいくつかあったが、それはよいとして、文中に主人公を描写しているところで、「彼女は大柄な女であった」というところがあり、この「大柄」を「大柄の着物を着た女」と訳していた。これは違うと言ったまではよいが、さてこの「大柄」の説明が難しい。「大きい」とも違うし、「太った」とも違う。全く困りはて、今さら翻訳の難しさをしみじみ知らされた。ただし彼女の英訳は全体としては立派で、私ならこう訳すと日本の英作文式に訳したものとは大部異なり、それなりに原作の香りを良く表現していて、彼女の文学的センスの深さに感銘したものだ。しかし逐字訳とは言い難いものであった。

もう一つ私自身の例を上げよう。それは現在私が用いている教科書の小説の中であるが、筋は双方共相手を未だ見たことない恋人同志が林の中の小川の橋の上でバッタリ顔を会すシーンで女が「私ハリーを待っているのです」と言うのに対して男が「私がハリーです」と答えると、女は突然"Then I'll turn around and go back."と言う。易しい英語だからおわかりと思うが、「では私は帰ります」ほどの意味だが(筋を説明しないと一寸変なやりとりだが)ここでのこのtunn around に当るうまい日本語がどうもない。「私はクルリと廻って帰ります」では(その通りなんだが)このシーンの女の言葉としては全々ブチ壊しである。他にさがしてみたが、この場合に合った適訳は全く見当らないので、上記のように省いて学生に訳さざるをえなかった。しかしそれでは彼女が「身をひるがえして去る」というこの場合の態度や気持が伝って来ないのだ。このようなことは他にもあって困る。

科学論文はいざ知らず、文学的作品、ことに詩などは、私は逐字訳は不可能だと信じている。先年、川端康成がノーベル賞受賞の際に行った「美しい日本の私」というスピーチの英訳を読んだ。訳者は今をときめくカリフォルニア大学の教授で日本文学研究の第一人者のサイデンステッカー氏である。大いに期待して読んだのだが、全くガッカリだった。これが川端のあのスピーチかと思うくらい意味が伝っていない。中でも良寛の歌は味もそっぺもなく、まるで別人のようだった。氏にしてかくの如しである。

私は文学作品の逐字訳は駄目だと思う。作品の内容を充分鑑賞出来て、優れた文学的才能をもつ、出来れば自分自身が詩人であるような人

による自由訳がよいと思う。先のアメリカの女子学生もその一人に入ると思うが、良い例としてはアメリカにエズラ・パウントという詩人がいる。アメリカ文学を学んでいる人なら誰も知っている大詩人だが、弟子のT·S· エリオットが功成り名逐げたのに反し、やや奇人的のところがあり、むしろ不遇だった詩人だが、私は長い歴史の鑑賞を経たら、エリオットより彼が歴史に残るのではないかと信じている。その彼は中国の詩人、李白、杜甫、王渭などの漢詩をアメリカに紹介したことで有名であり、日本に関する詩もある。彼の訳は自由訳である。情景や人物の立たずまいは可成り違っているときがあるが、しかも一読してそれが李白や杜甫の何の詩であるか漢詩を知る私達日本人には解る素晴しい訳である。私が友人の送別会の席で、王渭の日本でよく送別のとき吟ぜられる漢詩「渭城の朝雨、軽塵をうるおす」の彼の英語訳を余興に読み上げたところ、上に述べたように逐字的には可成り違っているにもかかわらず、会衆には直ぐに王渭の詩であることがわかって喝采してくれた。

逐字訳が必ずしも優れていないし、詩のエスプリを伝えない例として、ヴェルレーヌの「秋の歌」の上田敏の訳と、後にこれを逐字訳した堀口大学の訳詩がある。「ビオロンの」で始まるこの歌は日本でも若者の心を沸かせたものだ。

フランス語の原詩はここでは省いて、二人の訳詩を並べてみよう。

（上田訳）

秋の日の
ギォロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かえて
涙ぐむ
過し日の
おもいでや。

げにわれは
うらぶれて
ここかしこ
さだめなく
とび散らう
落葉かな。

（堀口訳）

秋の
ヴィオロンの
節ながき啜泣
もの憂き哀み
わが魂を
痛ましむ。

時の鐘
鳴りも出づれば
せつなくも胸せまり
思い出ずる
わが来し方
涙は湧く。

落葉ならぬ
身をば遣る
われも
かなた　こなた
吹きまへる
逆風よ

この何れがヴェルレーヌの心を良く伝えているかは言わずと知れたことと思う。　と言ってこのような自由訳は先にも言ったように優れた詩魂の持主でなくては不可能なのであって、ここに私のような凡人の悩みが相変らず続くわけである。

（教授）

「本」からの思い出

竹内　要

国文科の新設ということで、わが図書館には、しばらくの間に国語・国文関係の図書が集中的に整備された。これまで常備されていた全図書の約3分の1以上という冊数が、この間に入庫したということである。整理も一段落と聞いて書庫を拝見した。さすがに国文科という焦点化された設定だけに、関係図書が見事に書架に配列されていた。私自身、直接に関連領域の勉強をしているものではないが、むかし懐かしい本の何冊かに出合ったのである。ひんやりした書庫の中で出合いのあった多くのなかの1冊からの思い出を――。

書庫の配列からは初めの方、国語学関係図書が続くなか、下段に近いところに目立つ外見ではないが、東条操：国語学新講が目に入った。今はすっかり遠くに離れてしまった書名であったが、瞬間、思い出ははるかに飛んで行った。連想反応的に記せば、＜東条操：国語学新講＞→方言研究→柳田国男：蝸牛考という図式である。

時は昭和20年代の前半、国語学の講義の中で「方言周圏論」について聞き、柳田国男：「蝸牛考」の存在を知ったのである。それは、かたつむりの方言についての調査から、東北地方と九州の一部地区で同じナメクジとかツブリ、関東地方や四国がカタツムリで同様、中部地方や中国地方はマイマイなど、京都を中心にして同心円を描いたような分布の状態をとらえ、方言が文化の中心地から変化していくものと推定し説明したものである。つまり、池の中に石を投げた時、石の落下した点から順次同心円の波の輪が大きく広がっていくあの現象に似ている。当時の社会状況でもあり、いろいろな意味で飢えていた私は、この講義に大変興味を持ち、ぜひとも、「蝸牛考」を読んで言語の社会現象というか、方言について知りたいと思った。そして、いくつかの図書館や本屋を探して歩いたが、どうしても出合うことができなかった。その中の一つなどは、今でも覚えているが、某図書館のカードには確かにあったが、どうしたわけか何回か請求しても「貸出中」ということになっていた。

こうなると、いっそう読みたくなり、どうしても「方言周圏論」の御本体に会わなければならないような気持ちになってしまった。古本屋もよく回って歩いた。その頃は今よりも古本屋の数も多く、大変なこともあったが、しかし目標のあることでもあり、一面では楽しいことでもあった。しかし地方ではどうしても見当らず、以前にも行ったことのある東京は神田の古本屋街へと遠征をはじめたが、そこでもかんたんに出合うことはできなかった。食糧事情も悪い時代、上京するたびに軒並みに1冊の本を探し歩いたと言えば、いかにも学究に聞えてかえって恥ずかしいが、それ程のことではなく、結構楽しんでいた。とにかく、いく度かくり返し古本屋巡りをしたのである。

いま、手元にある「蝸牛考」（創元社版・昭和18年2月25日初版発行・7000部発行）は、このような経過があって神田の古本屋から私の手に入ったものである。うす汚れてしまっているが、裏表紙の内側に「1948・12・4」と書いてあるところを見ると、昭和23年の師走に巡りあえたことになる。

その時も、いつものように古本屋を回り歩いていた。間口の余り広くない、しかしきちんと並べられた本の中に、ちょこんと1冊、小さな本が見えたが、それが「蝸牛考」であった。全く目立たない姿で、うっかり見落すところであった。「あった」と心の奥底で叫び、そして、おそるおそる手を出して引き出し、「これか」と確かめたように覚えている。しかし、それまでの経過にしては、意外に冷静であったようだが、その後になってやはり喜びは、うつぼつと湧いてきたように思う。

以来、これまで長い間には、いろいろな書物を探し、求め、それに学んで今日に至っているが、これほどに、つかれたような本の求め方は思い出せない。当時の置かれた状況と若さの故もあるが、また別に最近の状況は飢えて求めるというよりも、出版界が飽食の状況ということにもよるかも知れない。

後日談めくが、「蝸牛考」一本は今から2年余り前に岩波文庫の1冊に仲間入りし、姿を変えての再会となった。それより以前に筑摩書房の定本柳田国男集第18巻として方言覚書などと共に収められてはいるが独立したものではないので岩波文庫版は想いひとしおといったところであった。

それにつけても、方言周圏論を講じられたA先生は、いま、どこに居られるであろうか。また、A先生を通じて別の方言の参考書を貸して下さったH先生、さらに別な立場で方言研究の実践のあり方を示して下さったC先生など、ディレッタントに終ったような私のことは覚えていては下さらないかも知れないが、御健在の情報も入ったので、ほんの近い将来に昔語りをしたいと思っている。そして、現在の歩んでいる道も弁明しながら、さらに己が前進の糧にしたいと思う。

私にとって思い出の本はいろいろあるが、その中の1冊を追想する機会となった。本は、そこに書かれ表現されたことから、いろいろ読みとるものであるが、一方その本をとりまくことがらの中にさまざまな思い出を残してくれるものでもある。物的には客観的な存在である書物も、一人ひとりの人間にとっては、極めて個別的で主観的で独自な意味を持つ存在である。そんな思いからの私と蝸牛考とのあいだがらであるが、しかし考えてみれば、こんなことは、おのおのが静かに、ひそやかに己が心の奥底に暖めておけばよいことなのかもしれない。

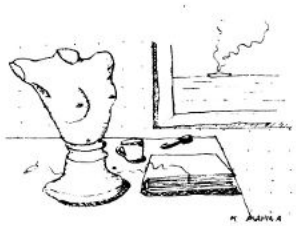
追記：誤解を招かないために、2、3点についてふれる。

① 当時の国語学全般については、時枝誠記教授が中心であったし、同教授の著書もわが図書館の東条教授の近くに拝見された。ここでは、方言についての私の思い出につながるものとして。

② 「蝸牛考」の初版は、刀江書院版では、昭和5年であり、創元社版が昭和18年である。

③ 方言あるいは方言周圏論そのものについては、あえてふれなかった。それは私の力を越えることと、この小文の目的でもなかったからである。

（教授）



日記——私の学生時代——

金子泰子

日記をつけ始めて15年、数えてみると、様々な大きさの日記帳が11冊になっている。

「赤毛のアン」に夢中になった少女の頃からだ。崇拝、親愛、追伸など、訳本に頻々と出てくる熟語が全て新鮮な響きをもって感じられたあの頃。アンの想像の物語を、何ページにもわたって書き写してある。昭和41年、小学校5年生の秋のことである。

中学生時代には、担任教師との交換日記がある。1クラス50余名の日記帳を、毎週欠かさず、朱インクでの返事をつけて返してくれる。目の大きな、影の深い顔をした、美術の女の先生だった。展覧会に出品したカンナの油絵が落選したと、授業中に寂しそうにつぶやいたことを思い出す。そういえば、燃えるように赤いカンナの花の似合う、情熱的な先生だった。めずらしく日記帳の返却が遅れた日の朱インクには、「遅くなって申し訳ありません。ある展覧会のため、絵を描いていたのです。より強く生きようという気持ちを訴えたくて、大きな大きな木の絵を黒と朱で描きました」とある。私たちが中学を卒業するのと同時に、「京都でもう一度絵の勉強をしてきます」と言って退職された先生。後に何度か手をつくしたが、どうしても住所を知ることができず、今でも心残りになっている。書くことの楽しさを知ったのは、この先生のおかげだと思う。

高校、大学時代、日記は、私の精神面での大きな支えになってくれた。自意識が強く、見えっぱりな私の格好の話し相手であった。自分の心境を少しでも適確に表現しようと、あれこれ言葉を模索した跡が見える。読み返すと、赤面するような感傷的な表現もあるが、それなりに甘えを抑え、自己を高めようと努めている様子がうかがえる。

昭和48年11月7日（大学1年の秋）

大学祭が終ってもう1週間が過ぎた。速い速い。時が経つのもこれだけ速いと、もうどうでもいいという気になってしまう。

仏語の藤原先生が言った。「女である前に学生であることを忘れてはいけない」と。学生の本分を忘れがちなこの頃、強烈なパンチを食らった気分だ。

しかし、今夜のように静かな秋の夜には、少しだけ変えて、「女であると同時に……」としておこう。

あと半年で20才だ。

近代詩の講義の影響だろうか。立原道造や高村光太郎の詩の写しがあちこちに見える。南こうせつの「神田川」や、森進一の「冬の旅」の歌詞が書きつけてあるのもなつかしい。

昭和50年4月3日（大学3年の春）

言いようのない不安に襲われる。女であることをこんなにも苦くかみしめることは初めてだ。女であることが勉強の妨げになる。女であることが、こんなに膨らんでいる私の希望を壊そうとする……。自分の意志を通すのが怖くなってきた。私の考えていることは、そんなに理想論だろうか。非常識だと大人は言う。一般常識なんかに負けるものかという気持ちはあっても、自分を傷つけてまではというのが、情けないが本心だ。負けてしまいそうだ。

幾つかの難関を通り越して、ようやく実現することになった米国留学をその秋にひかえて、揺れ動く心境が記されている。必死で時を駆け抜けていたあの頃がなつかしい。

回想はここまでにしよう。大学院生時代、結

婚、出産などは、まだまだ記憶に新しい。とりわけ昨年12月の父の死は、生々しすぎる。10年を隔ててようやく、余裕を持って自分の過去を省みることができるということだろうか。古い日記を、こんなにゆっくりと、時間をかけて読み返したのは初めてのことである。

久々に学生時代を振り返り、「今の学生の気持ちが理解できなくなってきた」と感じ始めていた最近の自分を反省する。20才前後、とりわけ女性にとってその時期は、多くのことに心を動かす、それこそ一大事件のように真剣に、深刻に考えられるのも、この時期ならではのことだ。夢多き学生たちに、心からの声援を送ろう。まだまだ、私だって負けてはいられないが、若さが一つの大きな宝であることに変わりはない。

（講師）

酒のみの詩

塩入秀敏

酒は嫌いではない。万止むを得ないつきあい酒も結構あるので、飲む回数は案外多いのかもしれない。さりとて、たとえ僅かでも毎晩飲まずにはいられない程好きでもない。しかし、酒のみの詩人・歌人達や、彼らが読んだ詩や歌は文句なく好きである。中国の詩人なら李白や白楽天などであり、日本人なら大伴旅人や吉井勇・若山牧水などである。彼らの作品も文学作品である以上、鑑賞者を意識しての創作であることを否定できないとしても、そこかしこ本音が吐露されていると思えるのだ。

彼らの中でも、白楽天は特に好きな一人である。その白楽天の詩に「対酒」（酒ニ対ス）という七言絶句がある。

蝸牛角上争何事　石火光中寄此身
随富随貧且歓楽　不開口笑是癡人

題名の通り、酒を前にして気焔をあげている。けれども、酒席で酔いにまかせての大気焔ではない。たった28字の七言絶句ではあるが、その中に白楽天の人生感が表現されており、また人となりもうかがえるのである。

人々によく知られたこの詩の中でも、起承の二句は特に親しまれている。「蝸牛角上の争」（荘子則陽篇）の寓話を採り入れ、非常に平易な表現ながら、永久不変の道理を説いている。しかし同時にまた、その道理に抗し得ない無常感を強く感じさせられる。転句に至ると、貧富の分に応じて歓楽しようという心になり、一見虚無的とも思え、結句では、むしろ頽廃的でさえある。結局、無常→虚無→頽廃という図式によって完成させられている詩であることになる。

けれども、我々はこの詩を単なる無常・虚無・頽廃の詩として受け取ってはいけない。白楽天は若い頃に左遷されて地方の微官に終り、官を退いてからは「酔吟」と号した。不遇に甘んじているうちに、立身出世欲や物欲を超越した心境に達するのだろうか、宴席の中でもくだけ切らず、かといって道学者臭さもあまり感じられず、むしろ潔いおかし味を強く感じる。他力本願も他力が極まると自力と等しいという。虚無・頽廃も極まれば、おおらかな真面目に至るのではないだろうか。

我々が生きる現代で、人間は社会という大きな機械を構成する一ケの部品にすぎない存在になってしまっている。それがために、喪失しつつある人間性を回復する試みも盛んにされている。めまぐるしく急しく毎日に追われている私に、白楽天のこの詩は、おおらかに人間らしく生きろと教えてくれていると思えるのである。

（講師）

ジョルジュ・サンドと「愛の妖精」

2年　中沢恵子

「愛の妖精」といえば、ジョルジュ・サンド（フランス・1804－1876）の作品の中でも、傑作とされている田園小説のひとつである。シルヴィネとランドリーという双子の兄弟と野生的村娘ファデットとの、三人の絡み合いとその展開が描かれている。一見、双子が主人公に思われるが、単純思考のランドリーや、女女しく乳離れできないシルヴィネではなく、思慮深く情愛を備えた森林や草原を駆ける少女ファデットこそ主人公であるという点に醍醐味があると言えよう。また、おとぎ話的に安易すぎる結末は残念だが、エピソードの絡みと、人物の心理分析・変化等の展開の巧みさもおもしろい。

簡単にストーリーを紹介すれば、次のとおりである。

異常に近い愛情で結ばれた双子の兄弟が、家庭の事情で離される。自立心の強いしっかり者の弟ランドリーは、新しい環境に親しんでいくが、依頼心が強い兄シルヴィネは、弟が自分から離れていく様子を哀しみ、弟の成長を嫉妬する。

さて、ランドリーは、村の嫌われ者である少女ファデットの真実の優しさに魅かれ、まわりの反対も押し切って恋人同志となる。一時は、彼女の貧しくゆがんだ家庭や、偽りの噂の為に離れ離れになるが、ファデットがしとやかな貴婦人に変化した上、祖母の秘かにためていた宝をみつけて金持ちになって帰ってきた事で、反対していた人々も、次々に二人を理解し、祝福するようになる。最後まで弟の恋に嫉妬してファデットを憎んでいたシルヴィネも、ついには彼女の人格に敬服し、祝福する。

ところが、シルヴィネは、いつしか自分から身をひかなければならないと判断するほど彼女を愛してしまい、軍人になるべく男らしく去る。

ランドリーとファデットは家族全員の祝福を受け結婚し、幸福になる。一方シルヴィネも軍人として成功し、大団円を迎える。

さて、以上であるが、主人公ファデットの中には、作者サンドの少女時代の面影がうかがわれる点にも注意したい。ファデットのように貧しいいなか娘ではなかったにせよ、祖母と母の争いの中に置かれたサンドは幸福とはいえなかった。むしろ、ファデットに与えられた自由さが、サンドにとっては憧憬であったかもしれない。父は亡く、母と別れ、祖母のもとですごしたという境遇も、母に同情し、かばっていた点も共通している。

しかし、ファデットがランドリーと幸福になった事に反するかのように、サンドの恋愛は失敗続きだったらしい。フランスの一流作家に数えられ、男装の女流作家でもあり、ゴシップ・メーカーでもあった彼女の恋人は、作家のジュール・サンドオ、詩人のアルフレッド・ド・ミュッセ、音楽家のフレデリック・フランソワ・ショパンと豪華な顔ぶれであった。ところが、男性的なサンドに対し、恋人達はそろって繊細で女性的であるという性格差と、母性愛にほとんど近い恋愛感情しか持てないというサンドの愛し方の為、三回とも失敗している。ファデットも母性愛の強い女性ではあるが、同じ母性愛の持ち主だとすれば、何という差であろう。これは、「愛の妖精」中のファデットが、きわめて、理性的に分析しつつ相手を見守る母性愛を備えているのに反し、サンドは、理性よりも感情というような母性愛であった為だろう。自分の性格を理想的に変化させたファデットのハッ

ピー・エンドは、サンド自身の希望を描いているものと思われる。

サンドの幼少時の家庭の不幸と、愛情の渇望とが、この傑作を描かせたといっても良いと思う。もっとも、この母性愛は、彼女が肉体的に不感症だった為に生じたという説もある。これについては、サンド自身、小説の中で告白をしている。

「あの人のそばにいると、不思議な気の遠くなるような渇望を感じますが、それはどんな肉体の抱擁でも満たされません」

「私の欲望の巨大な飛躍が続いている間、私の血は凍りつき、哀れにも力を失ってしまいます」

それ故、愛や欲望を否定しながらも、心底ではそれを求め、男性的でいながら女性を捨てきれない彼女が存在したのであろう。その苦痛が、彼女に傑作を書かせたのだとも言えよう。しかし、一女性としてのサンドにすれば、女流作家として称せられ、ミュッセ・ショパンといったすばらしい男たちの恋人となりながらも、案外不幸な人生だったようだ。もっとも、サンドが不幸だったか、そうでないかなどとは、一概には言えないのだが。

ゴシップ・メーカーのサンドではあるが、他のゴシップ・メーカーと違い、骨組のしっかりとした作品が多いし、作品がゴシップ負けしているとは思えない。どうやら、彼女の場合、ゴシップの方が先行してしまい、作品の評価が不当になる傾向にあったようだ。これは、実に残念な事である。

このような、一般の女性とは異なる背景を持つサンドの代表作でもあり、彼女の理想を表している作品でもあるのが、「愛の妖精」である。まだ読んだ事のない人には、一度は読んでおいてもらいたい作品である。必ずや、魅感される物があると思う。

画一化社会と読書の必要性

1年　佐々木　み　か

私は、考え方や性格的に「ちょっと変わっていて面白い」と感じる人に、稀に出合うと、本当に嬉しい気持ちになる。その人に惹きつけられ、後光が射しているかのように見えると言っても過言ではないほどである。というのは、近頃、何事においても、画一化されつつあるように思えてならないからであろう。ファッション、ヘアスタイルから始まり、話し方や考え方までもが、個性を失いつつある。一種の恐ろしい状態になりつつある。その原因は何か、と考えてみると、まず、大衆伝達の発達がとりあげられるであろう。

テレビ、ラジオ、雑誌諸々によって、画一化された考えを押しつけられているのだ。そして押しつけられたものを、そのまま受け入れているのだ。それは、たとえデマであろうとも、一度伝達されてしまえば、それは否応なしに拡まり、それが正しいものだと思われてしまう。そして、それに反するものは、極端に言えば、変態扱いされ、恥ずかしいことだというように考えられてしまう。いい個性を持っている人がいたとしても、多勢に無勢で、画一化された人々に埋もれてしまうこともあろう。人の目を気にして、個性を表に出すのを拒んでしまう人もあろう。

或る作家が、「今、人間をダメにしているのはテレビだ」というようなことを言っていたが、一概には言いきれないまでも、そのとおりだと

思う時が、しばしばある。私達の年代は、生まれた時から家にテレビがあり、テレビと共に成長したという感じで、テレビとは特に密接な関係がある。私もテレビ好きで、放っておけば、一日中でもみているといった頃があったほどだ。しかし、最近は考え方が変わってきたのか、テレビをみていると、異常なほどに腹の立つことがある。知らず知らずのうちに文句をつけるために、テレビをみているというような気さえする時がある。それは、テレビに押しつけ文化を感ずる時であろう。その押しつけ文化の中でも、自分自分で、判断したり、考えを深めたりしていければいいのだが、なかなかそのようにはいかないのが、現実である。その点で、やはり活字文化は優れている。なぜなら押しつけているというふうに、言いきれないからである。読者自らが、多くの中から選択して読むことができる。そして、同じ物を読んだとしても、人それぞれ、とり方は違うし、そこから様々な考えが拡がっていくのである。それが、個性形成の上で、十分に手助けをしてくれるように思う。

私の場合、中学時代までは、活字に対して異常なほど拒否反応を示したもので、自分から本を手にとるようになったのは、つい最近のことである。切っ掛けは、自分があまりに無知だということに気づいたためと、本の広さ、深さを知ったためである。本を読むといっても、私は大体において面倒臭がり屋で、肩の擬るものは避けている。だから、文学史上に名を轟かすようなものは極めて少なく、個性的で面白い小説若しくはエッセイが主なのである。今まで出会ったことのない表現や考え、そして人生などに直面し、何とも言えぬ充実感や新鮮さを味わう。そして時には考える。

そういう本の面白さを、今しっかりと見直す必要があると思う。人それぞれ好みは異なるから、それぞれの面白さを見出せばいいのだ。そうすれば、テレビにはない面白さが、きっと見つかる筈だ。本によって、デマに惑わされることのない正確な知識と、今最も失われつつある個性とを、養っていきたいものだ。

資料紹介 ―― 逐次刊行物，雑誌 ――

本学図書館では、下記の雑誌(バックナンバー)及び逐次刊行物の資料を備えています。卒業研究に、又各自の学習に大いに活用して下さい。

○ 雑　誌（学術雑誌のみ）

美術手帖（美術出版社）
児童心理（金子書房）
教　育（国土社）
青年心理（金子書房）
体育の科学（体育の科学社）
子どもの本棚（明治書院）
幼児の教育（日本幼稚園協会）
季刊音楽教育研究（音楽之友社）
文　学（岩波書店）
中等教育資料（大日本図書）
月刊福祉（全国社会福祉協議会）
教育美術（教育美術振興会）
初等教育資料（東洋館出版）
保育の友（全国社会福祉協議会）
日本児童文学（偕成社）
幼児と保育（小学館）
音楽之友（音楽之友社）
栄養と料理（女子栄養短大）
芸術新潮（新潮社）
教育心理（日本文化科学社）
思　想（岩波書店）
月刊絵本とおはなし（偕成社）
乳幼児の教育（黎明書房）
こどものとも（福音館）
ムジカノーヴァ（ムジカノーヴァ社）

○ 逐次刊行物

出版年鑑（出版ニュース社）
毎日年鑑（毎日新聞社）
全国市町村要覧（第一法規）
青少年白書（大蔵省印刷局）
労働白書（日本労働協会）
図説老人白書（碩文社）
厚生白書（大蔵省印刷局）
現代用語の基礎知識(自由国民社)
信毎年鑑（信濃毎日新聞社）
経済白書（大蔵省印刷局）
社会保障年鑑（東洋経済新報社）
婦人労働白書（大蔵省印刷局）
日本の教育（現代書館）
保育白書（草土文化）
朝日年鑑（朝日新聞社）
日本史文献年鑑（柏書房）
日本統計年鑑（日本統計協会）
国民生活白書（大蔵省印刷局）
婦人白書（草土文化）
子ども白書（草土文化）
精神薄弱者問題白書（日本文化科学社）

北村達三先生より図書寄贈

本年より英語担当として着任された北村達三先生より、御着任当初、英語・英文学を中心に、200冊の図書を寄贈していただきました。丁度、折しも図書館では、来年度開設が予定されている、国文科の専門図書の選定、発注リスト作成の作業を進めていたときでもありましたので、これら英文学関係図書を早速「外国文学」の科目用に申請し、ほとんど新規購入をせずにすますことができました。先生は、本号の巻頭にも一文をおよせいただきましたが、英文学、とくに英詩に御造詣が深くていらっしゃいます。

以下、主な図書をここに御紹介して、紙上をもって厚く御礼申し上げます。

英語英文学講座 1～5	河出書房	言語美学（カルル・フォスレル）	小山書店
アメリカ文学とキリスト教	北星堂書店	動詞叙法の研究（細江逸記）	泰文堂
現代詩と個性（ハーバート・リード）	南雲堂	英文法論考（大塚高信）	研究社
現代詩と伝統（C・ブルックス）	〃	英語類語辞典（井上義昌）	開拓社
現代詩の領域（アレン・テイト）	〃	動詞時制の研究（細江逸記）	泰文堂
エリオットと詩の問題（熊代荘歩）	北星堂書店	英語・文法と鑑賞	開文社
現代アメリカ文学選集 1～10	荒地出版社	語学試論集（佐々木達）	研究社
アメリカ文学作家シリーズ 1～9	北星堂書店	英語を学ぶ人のための英語史（北村達三）	桐原書店
文学におけるアメリカの伝統（L.ハワード）	篠崎書林	英語の文章リズムと配語法（斉藤静）	白桃書房
ロバート・フロスト研究（片岡甚太郎）	北星堂書店	The Catcher in the rye（J.D.Salinger）	
シェイクスピア研究（斎藤勇）	研究社	Excursions in fact and fancy（John E.Brewton and others）	

須永　淑先生からも図書寄贈

前号（8号）でお知らせだけしましたが、昨年度後半、須永先生からも、250冊余の図書寄贈を受けました。内容紹介ができませんでしたので、ここに一・二冊紹介させていただき、御礼を申し上げます。

子どもの国からの挨拶（今江祥智）	晶文社	冬の旅（立原正秋）上・下	新潮社
人間の運命（芹沢光治良）1～3部	新潮社	父親（遠藤周作）上・下	講談社
僕たちの失敗（石川達三）	〃	にっぽん三銃士（五木寛之）上・下	新潮社
ムツゴロウの結婚記（畑正憲）	文芸春秋	人間のない神（倉橋由美子）	徳間書店

図書館からお知らせ

※ブラウジングルーム　しばらく閉めます。

本年度は、国文科開設準備のために書庫に多量の図書が入荷し、審査のために一部書庫の資料をブラウジングルームへ移動しました。このため、現在、ブラウジングルームを閉めてあります。来年3月まで御不便をおかけしますが、御協力下さい。

※文学関係図書　書庫へ移動

同じく、閲覧室の日本文学、日本語学関係（ポピュラーな小説類は除いて）図書を審査のため書庫へ移動しました。調査・研究のため利用したい方は係に申し出して下さい。

※自由文庫　開設準備中

先生方や、卒業生から今までに文庫本の寄贈を受けてありますが、図書館では、これらポピュラーな文庫本のみを蔵書に加えないで、もっと自由な方法で貸出、返却が出来る「文庫」の形式にしようと準備を進めています。手持ちの文庫本の中で用ずみのものなどありましたら、このコーナーへ寄附して下さい。尚、文庫の名称を募集中です。

※　【図書館ガイド】は、本年は休みます。

寄贈図書案内

— 昭和57年度主な寄贈 —

美ケ原高原美術館	美ケ原高原美術館	美ケ原高原美術館	寄贈
ゲームのいろいろ（江橋慎四郎他）	国土社	犬飼 己紀子先生	〃
セラピューティック・レクリエーション入門	不昧堂出版	〃	〃
デイリーストレッチ体操（安田矩明）他6冊	大修館書店	〃	〃
原色日本水彩画集 1977	日本水彩画会	本学元教授 林幸四郎氏	〃
ユトリロ（フランシス・カルコ）	二見書房	〃	〃
秋山物語（浅川欽一） 他7冊	信毎書籍	〃	〃
西沢爽定型詩集 いのちさみしと	全音楽譜出版社	西沢 爽先生	〃
はやり唄の女たち	新門出版社	〃	〃
国文学年次別論文集	朋文出版	〃	〃
中原中也の復活 他1冊	東京書籍	藤原 明夫氏	〃
国語科教育の理論と展開（中西一弘）	第一法規	金子 泰子先生	〃
家郷漂蕩（北川原平蔵）	不識書院	北川原 平蔵先生	〃
わが母の肖像 他5冊	理論社	はま みつを氏	〃
郷土の地誌 上田盆地	上田市立博物館	上田市立博物館	〃
郷土の生物 上田付近の野鳥	〃	〃	〃
五加の歴史 5冊	五加自治会	五加自治会	〃
武田助左衛門氏顕彰記念誌	武田助左衛門氏顕彰会	武田助佐衛門氏顕彰会記念誌部	〃
雷電の里 その文化財（東部町）	信毎書籍	武舎 秀雄氏	〃
薬師堂と西田沢の歴史	武舎秀雄	〃	〃
長野県史 近世史料編 七巻(二)他	長野県史刊行会	長野県	〃
長野県教育史 第二巻	長野県教育史刊行会	長野県教育委員会	〃
長野県社会教育史	長野県社会教育史刊行会	〃	〃
人は他人が思うほど幸福でも不幸でもない	㈱ぎょうせい	松田 幸子先生	〃
二拍子の青春 他2冊	長野中学校第45回生記録刊行会	竹内 要先生	〃
日本絵巻大成 1・22	中央公論社	紀伊國屋書店	〃
浮世絵聚花 他洋書12冊・和書2冊	小学館	〃	〃
実践女子学園八十年史	実践女子学園	実践女子学園	〃
上田の幕末・維新	上田市立博物館	上田市立博物館	〃

編集後記

おだやかな日和のつゞく晩秋であるが冬はもう近い。朝の空気の冷たさに手袋をとり出した。

これをぬぐ時は春なのだ。

今年の図書館は、誰もが本当に春待つ思いで厳しい活動を力の限り走りぬいてきた。そして今一階の書庫には新設予定の学科関係を中心に、新規購入の7000余冊が用意されて、書架にならび来るべき春に備えている。今、編集にあたって顧みると、地下で息づく根のような学内をあげての清新な活力が、新しい図書館だよりを生みだした感が深い。

御忙しい中を何かと御力ぞえいたゞき、原稿や美しいカットをくださった先生方に、又寄稿された学生諸姉に心から御礼申上げる。この号を図書館の歩みの新しい手がゝりとして、自主的な学びの場として、一層の整備充実をめざしてゆきたい。

（須永）

上田女子短期大学 図書館だより 第9号 1982－12.1 発行
編集 上田女子短期大学図書委員会
発行 上田女子短期大学図書館